2014年　第７回　国際アイリス・マードック学会報告

大　槻　美　春

2014年9月12、13日、ロンドン、キングストン大学にて、第７回国際アイリス・マードック学会が開催された。 2年に一度開催される国際学会は、キングストン大学にとって開催5回目、10周年を記念する会であった。Archives and Afterlifeをテーマに、マードック没後の研究と大学図書館内アイリス・マードック・アーカイヴの成果が検証された。そして記念の今学会は、芸術に彩られていた。

12日と13日の両日は、ピーター・コンラディの講演を含む4部門の全体会、40以上の論文が各分科会で読まれた。全体会では、関係者がエピソードを語り、スクリーンには未公開のマードックの写真が映しだされた。公開に年数がかかる一部の手紙の事情など、情報が次々と披露された。講演では、フィリッパ・フット、レイモンド・クノー、スーザン・ソンタグ、シモーヌ・ヴェイユ、ヴットゲンシュタインなどの思想とマードックとの関係が論じられた。特に、数人の愛人をもったエリアス・カネッティは、複数の講演者に取り上げられた。なお近年、学会の成果は毎年のように研究書として出版され、学会報告はキングストン大学の国際マードック学会ホームページに掲載されている。

学会前日の11日には、キングストン・ミュージアムでのIris Murdoch and Harry Weinberger展に合わせたシンポジウムが開催された。マードック作品のテーマを彷彿とさせるウエインバーガー絵画の展示であり、シンポジウムは12日と一部重複した。二人の出会いは1977年、一緒にビクトリア・アルバート・ミュージアムを訪れたスケッチが描かれている。手紙からは、マードックがユダヤ系の画家ウエインバーガーの人生経験を尊敬し、絵画理論をやりとりし友情を深めたことがわかる。両シンポジウムでは、美術理論とマードックの哲学、文学作品、書簡の内容、その学術的意義などが議論された。

全体の中で最も印象的だったのは、12日夕方に開催されたコンサート。ビートルズにはじまり、作品の朗読をはさみ、モーツァルトなどマードックが愛した歌が披露された。*Never Mind about the Bourgeoisie*（2014）を編集出版したジリア

ン・ドーリィがソリストをつとめた。コンサート前には、同書と共にフランシス・ホワイトの新刊 *Becoming Iris Murdoch*（2014）が紹介された。次に、2日目の舞台監督ビル・アレクサンダーの講演。彼は、マードックの生前から彼女の作品を舞台化しているが、俳優顔負けの美声と身振りで、マードック作品の演劇史を語り、『海よ、海』の舞台構想も話した。そして目立ったのは、マードックで博士号取得の若手研究者。彼女たちは世界中で開催されているマードック学会に応募し、発表している。その一人 Fiona Tomkinson は、2015年3月末京都ノートルダム大学で開催の Kyoto Contemplation で、マードック研究発表を予定している。

国際マードック学会が開催されるキングストン大学：ウオータールーから電車で 30 分

14日、恒例のロンドン・ウオーキングツアーは、地下鉄グロースターから、マードック晩年のロンドンでの住まい Cornwall Gardens のフラット周辺を通り、*The Green Knight* などの舞台でもあるケンジントン公園を散策、パブランチ後の解散となった。

会場コーヒールームの展示：アーカイヴのマードックの手紙は、研究者だけでなく、キングストンの学生、地元のボランティアなどの活動により活字化された。